

〈続〉仏教語・雑感・三題

松田二郎

彼岸・此岸

もう10数年前になるが、先輩のH氏からこんな話を伺った。——先ごろ、開腹大手術を受けてきた。麻酔で昏昏と眠り続けていた中でのこと。私は一人、うす暗い道を歩いていた。突然、目の前にきれいな流れの川が現われた。そして、川の向こう側はきらめくような美しい街並みがあり、歩いている人たちはみんな幸せそうに見えた。私は、一瞬、川を渡ってあちら岸に行こうと思ったが、思いとどまって、もと来た道をひき返した。これが臨死体験というものなのだろうか——。

12年前の6月3日、私は東京のS病院で心臓大動脈弁を切除して、牛の生体弁を縫合する置換手術を受けた。左右12対ある肋骨を束ねている胸骨を電気鋸でタテに真っ二つ切り離し、心臓が十分に見えるまで押し広げる開胸手術である。

手術前日、執刀医のT医師から「統計上、手術によるリスクは5%、しかし、私は100%成功させます」という非常に力づよいお話があった。つづいてT医師から「手術は成功させても、かならず出てくるのが合併症。その中で恐ろしいのが、脳梗塞です」との説明。またちょっと不安になったけれど、「私は先生にすべてを任せしています。明日はよろしくお願いいたします」と申し上げた。術後、私を襲った合併症は38の高熱3日間で事無きを得た。

さて、手術当日、緊張感から朝早く目が覚めた。そして思った——先輩H氏のように、おれも臨死体験とやらをしてみたいな。ほの暗い道を歩く。そこは此岸だ。そこを先に進むと、さらさらと清く流れる川がある。これは、三途の川なのだろう。その向こうには、きらきらと輝くばかりの美しい街並みがあるらしい。これは彼岸・極楽らしい。川岸近くに立ってこちらを見ているのは、20数年前に旅立ったカアチャンじゃないか。カアチャン、会いたかったよ、元気そうだね。川をじゃぶじゃぶ渡ってそっちへ行ってもいいかな？

まだ早すぎるからダメ。今は子どもや孫たちのためにがんばってそちらで暮らした。もうしばらくそちらで過ごして、あとでゆっくりおいで。待っているから。

そうお。じゃあ、今日は帰るけど、また会おうね。さよなら。——

こんな臨死体験の筋書きを勝手に考えながら、午前9時きっかり、麻酔注射をして眠りについた。目が覚めたのは、翌朝9時半、人工心肺装置を付けて生かしてもらったから、24時間半眠っていたと言おうよりも死んでいたと言おうの方が正しいかもしれ

ない。

で、期待していた臨死体験はどうだったか？ 何もなかった。誰も現われなかった。24時間半、ただ死んでいただけだった。

蛇足ながら、現在の春のお彼岸は、三月二十一日ごろが中日でその前後三日間ずつの七日間である。秋のお彼岸は、九月二十三日ごろが中日でその前後三日間ずつを加えた七日間である。

無学

私の母親は、5人きょうだいの末っ子である。上から、お辰姉さん、おしげ姉さん、繁次あんつあ（「あんつあ」は兄さんの訛り）、まさえ姉さん、そして自分である。私は4人の伯父伯母をそれぞれ住んでいる所で区別して呼んだ。高田馬場の伯母さん、沢畑の伯母さん（旧谷地町地内）、宇都宮の伯父さん、拝島の伯母さん（旧東京都北多摩郡拝島村）というふうにならぬ。みんな伯父伯母だった。ただ拝島の伯母だけは負けん気の強い性格で、怖いものと言えば、兄である宇都宮の伯父だけだった。

私は、大学に入学して一年間、この拝島の伯母の家に厄介になった。当時はまだ戦争の爪跡が残っていた。大変な住宅難で、学生向きの狭い貸し間を見つけるのも難しかった。見つけたにしても、べら棒に高い部屋代だった。結局、伯母の家から最寄駅まで歩いて20分、国鉄青梅線、中央線、山手線乗り継いで大塚駅で降り、大学まで歩いて20分、合計2時間半を費やす伯母の家に厄介になることになったわけである。

この負けん気の強い伯母と暮らして、参った、参ったと思うことが再三あった。例えば、こんなことを言われたことがある。「ジロウ、お前は東京の大学に入って自分は利口だと思っているか知らんが、わたしは無学だけれど、世間を渡る常識ではお前に負けないからな」。私はびっくりしながら「伯母さん、おれは自分のことを利口だと思つたことは一度もないし、伯母さんのことだつて、よくいろんなことを知つている伯母さんだなんて、いつも思っているんだよ」というふうなことを言ったことがある。私の母の5人きょうだいのうち、上3人は小学校を卒業しているけれど、下の2人、拝島の伯母と私の母は小学2年で終わっている。それだけ母の実家は貧しかったのである。「わたしは無学」と言う拝島の伯母の言葉にはどれほど多くの悔しさが込められていることか、私には十分察することができる。

さて、「無学」であるが、この語は元来仏教語で、学ぶこと無し＝仏道修行者が一切の煩惱を断ち尽くして、学ぶべきことはすべて学び、これ以上学ぶことが無い境地に至つたこと。また、その人、最上の聖者をいう。

この品格ある仏教語「無学」が、日常語として使われるとその意味は大きく変化し、「不学（学ばず）」「不能学（学ぶことわず）」ということになる。何らかの原因のために勉強しなかった、勉強したくてもできなかったのである。拜島の伯母の「わたしや無学」は、もちろん日常語に変化したものとして使われている。それにしても「無学」が元来仏教語であることは、私はついぞ知らなかった。変化しながら生きつづけている言葉は、実に面白い。

普請

私の父は、明治35年、寒河江の農家の三男として生まれた。小学校高等科を卒業後営林署に勤めたが、一念発起、上京して印刷用ローラー製造技術を修得した。ローラー製造業を手広く営んでいた神崎家に住み込んでのことであった。修業5年、22

歳で独立して「博秀社」の看板を掲げた。大正13年のことであった。それから12〜13年が、父の早すぎる絶頂期であった。私の母との結婚、男ばかり4人の子の親となった。ただ私の兄は数え年3歳で亡くなっているので、私には3人兄弟の意識しかない。家業の従業員は、父を含めて12人、朝から夕方まで活気に満ちた仕事場だった。

このころ、父と母の夢は、東京で手ごろな広さの宅地を求め、そこにいい普請の「わが家」を新築することだった。そのころの貨幣価値はどういうものだったかよくわからないが、30000円から40000円が必要だったそうだ。父と母は銀行と契約を結んで、積立て預金を始めたという。生活は順風満帆であった。

ところが、私たち一家のささやかな幸せをぶち壊すような大変な事件が起きた。昭和12年9月に勃発した日中戦争である。その翌年、私が小学校へ入学して半年経ったころ、私の家で働いていた明るく屈強な若者の人数は半減していた。そしてまた一年後、若者の数はさらに半減した。広い仕事場に大きな声が飛び交っていたが、一気に静かになってしまった。私の父、エビスさん（どういう漢字を当てるのか、今もわからない年配の人の名字）、それに母の従弟に当たる久蔵さん（この人の名字も忘れてしまった）、日々働いていた人はこの三人だけになっていた。若い人はみんな無理やり戦地に連れて行かれたのである。もうこんなに広い仕事場の付いた家は不必要ということで、私が小学校2年だった秋のころ、引越しをした。父の仕事場に転用できる狭い土間のほかに3部屋だけの、小さな家だった。当然のことながら、父の収入は激減、わが家の生活レベルも



2022年12月 残柿に冠雪

急速に低下。要するに、貧乏暮らしが始まったのである。

戦争は悪魔の仕業である。庶民の小さな幸せを奪い取るのだから。父と母は、それでも積み立ては続けた。「土地を求めて、いい普請の家を」という夢実現のために。しかし、悪魔はその残忍な手を緩めない。昭和20年5月25日の夜、東京最後の大空襲によって、私たち一家は命以外のすべてを奪われた。大勢の人々といっしょに、人間としての「どん底」に突き落とされた。

昭和32年4月、縁あって鶴岡南高に赴任した。両親を背負うようにして。昭和39年6月16日、ちょうど昼休みの時間帯だったが、新潟沖地震に見舞われた。生徒全員をグラウンドに集合させ、安全を確認したときのことである。クラス担任をしていた生徒の中の誰いうとなく、「おれたちのことは、もういい。先生の家はポロッチイので心配だ。おとうさん、おかあさんもいることだし」と声が上がった。「そうだ、そうだ」という声に押され、教頭の許可を得て走った。裏門から走ってもその30秒。倒れていたものは、本棚、テレビ、茶だんす、台所の食器戸棚くらいだった。父と母は、まだ茫然としていた。

この地震を経験した直後、私は妻と相談した。「地震に強い骨組みさえしつかりしていれば、外壁など安普請でもいいから、自分の家が欲しいね。こうして、昭和41年9月、私と妻は、わが家を持つことになった。私は鶴岡に来て、天神町（神明町）、鳥居町、鷹匠町（若葉町）など、間借り、借家をくり返すこと9年間、妻は私と結婚して3年後のことであった。無口な父は黙っていたが、母は「有難い、有難い」と喜んでくれた。息子夫婦の力を借りてのこととは言え、あの「自分の土地に、いい普請で」という夢がかなえられたのだから。

私は、右の文章中「普請」という言葉を何か所かで使った。家を建築する、新築する、という意味である。日常語としては、このような意味で使われている。しかし、「普請」とは元来仏教語で、鎌倉時代に禅宗とともに入ってきた語である。この語を丁寧に見てみると、「普」は、あまねく、広く、一般に、の意味で、「あまねく知れ渡る」などと使われる。「請」は、ある物やある事を他人に願ひ求める、の意味で、「許しを請う」などと使う。

では禅宗において何を広く願ひ求めるのかというと、堂塔はじめ寺院付属の建築・修理のために、檀家の人々に従事してもらうことを願ひ求めるのである。寺院関係建築そのものは専門の木工の仕事であるが、そのための資材や道具の運搬などの労役も多く必要としたことから生まれた言葉である。

寺院関係建築に際して「お手伝い」を広く要請する仏教語の「普請」が、日常語になると建築工事そのもの、道路工事そのものに「格上げ」されるのも、面白い変化である。